

天理教に関する外国語文献として、「おふでさき」や「みかぐらうた」などの原典の翻訳も含め、その歴史や教義などについての概説を試みた最初のもは、1895年(明治28年)発行の『日本アジア協会紀要』(Transactions of the Asiatic Society of Japan)で発表されたダニエル・クロスビー・グリーン(Daniel Crosby Greene)の研究論文「天理教一天の理の教え」(Tenrikyō; or the Teaching of the Heavenly Reason)であろう。この論文は、その後の外国人による天理教研究に関する第一級の基本資料となり、天理教という日本の新宗教を日本国外へ紹介するうえで大きな影響を与えたと考えられる。一方、このような学術論文ではないが、同時期の英字新聞やキリスト教関係の報告書などに、天理教に関する記述が散見されるようになった。今回は、グリーン論文が発表される1年前の1894年3月にThe Japan Weekly Mailに掲載された天理教に関する記事についてみていきたい。

The Japan Weekly Mail-A Review of Japanese Commerce, Politics, Literature, and Artは、1870年1月、横浜のJapan Mail社によって発行が開始された英国系英字新聞で、Japan Herald、Japan Gazetteとならび明治期の横浜における3大英字新聞の一つとされている。当初は、貿易や船舶、来日外国人、居留地での生活や文化の情報が中心であったが、のちに日本国内や海外のニュース報道が充実していった。その内容は、政治・経済・社会・文化面での日英間の相互交渉、日本に関する様々な事柄の紹介や時事問題など幅広い話題を扱い、当時の日本から欧米社会への情報発信において重要な役割を担ったとされている。また同紙は、グリーン論文が掲載された研究紀要の発行元である日本アジア協会の学会誌的な役割も果たし、欧米人のみた明治期の日本や日本における彼らの活動なども描くなど、当時の日本社会、日本と欧米諸国とのかかわりなどを知る上で大変的価値の高い資料となっている。

天理教に関する記事が掲載された1894年3月3日づけのJapan Weekly Mailの紙面は、全部で32ページあり、主な内容は、日本の新聞紙上での主要記事のまとめ、社説、日本国外のニュース、日本の宗教関係の記事、海外通信、スポーツニュース、最新の電信記事、日本への海外からの来訪者に関する情報などであった。宗教に関する記事を扱った「Monthly Summary of the Religious Press」は約2ページにわたり、そのなかで天理教に関して約半ページ割かれている。この宗教欄は月初めの号に掲載されることが多く、日本で発行された宗教関係の新聞や雑誌から主なニュースを拾い、紹介している。日本でのキリスト教伝道に関する記事が多いが、仏教や神道に関する出来事も掲載されている。この3月3日号では、まずキリスト教に関する記事で、名古屋で開催された行事が大変盛況であり、日本人キリスト教信者の信仰熱が高まりつつあるとの報告がなされている。続いて、同様の信仰的高まりが、日本の下層階級の人々にもみられるとして、天理教について書かれている。その内容の大半は、佛教学会発行の雑誌『仏教』の明治27年2月5日号に掲載された「評林 一種の怪教」(43~47頁)を英語で要約したものととなっている。ちなみに、この『佛教』の記事は、日本国教大道社発行の『日本国教大道叢誌』66号(明治26年12月25日)の社説「論天理教」(1~16頁)を基にしている。この記事の大意は以下の通りである。

「天理教(Ten-ri-kyo, the Religion of Heavenly Truth)」は、数年前に大和で「prophetess(女性預言者)」によって開始され、現在日本全国に広がっており、その信者は熱心である。仏教系雑誌『佛

教』によれば、天理教信者の多くは「明らかに文明化されていない野蛮な人」である。ある天理教教師によれば、天理教にはクニトコタチ・ノ・ミコト、オモタリ・ノ・ミコトなど全部で十の神がいるが、実質的には多神教ではなく、これらの神々が一つになった一神教である。これは日本の古代神話によく似ており、女性預言者ナカヤマ・ミキは、古代神話に新たな解釈を加え、現代における神話を再生、創造した。この新しい神話が、信者の急激な増加の直接的理由となっているかは定かではない。この宗教が広まった理由は、「天から露の雨」が振ってくるという「素晴らしい光景(vision splendid)」が多くの日本人の魂を高揚させ、「天の理(heavenly truth)」が信者の心を大和の聖地へと向かわせたためではないだろうか。ミキが生まれた大和は、イザナギとイザナミが最初に現れた場所であり、ミキが住む三島村は、この国、そして全人類の源である。「人類の始めと終わりは大和に繋がっている(The Alpha and Omega of humanity is connected with Yamato)」のだ。この教えはまず日本へ、そして海外へと広がっていく。短い宣教期間で日本に広がっており、これは人間業ではなく、奇跡である。やがて、天からの甘露が三島にある天理の寺に降り注ぎ、時が満ちた時、神から最上の守護が人間に与えられるのである。この天からの露に触れば、目の見えなかった人が目を開き、肺病が治るなど、あらゆる病気が根絶される。「そのような福音が、大和の女性預言者によって病める人々のまえに現れたのだ(Such is the gospel which the prophetess of Yamato has put before the suffering masses of her country people)」。この愚かさには否定できない、と『佛教』は言う。もし天理教が無力な狂信であれば、何も気にする必要はない。しかし、天理教は無力ではなく、日本中に広まっている。天理教寺院は新しく建てられ、参拝者であふれている。この新しい迷信の特徴である三味線と胡弓の音色はいたるところで聞かれ、熱狂的な信者が踊り、歌っている。日々の仕事はないがしろにされ、世間の秩序はみだされているのだ。『佛教』は、地方の行政担当者、教育者、僧侶に、この有害な迷信を止め、この狂信に対抗するように呼びかけている。『佛教』は、キリスト教神父にさえ、天理教の危機から日本の人々を救うために協力するように呼びかけている。

明治26年6月に羽根田文明の『天輪王弁妄』が出版されて以来、天理教批判書が次々と出版され、多くの新聞社がこぞって批判記事を掲載していたが、『佛教』の記事もその流れの一つだと考えられる。The Japan Weekly Mailの記事は、基本的に『佛教』の記事を紹介する形で構成されており、同紙自身の意図がどこまで反映されているかは不明である。つまり、天理教に関してどのような評価をしているかは判然としない。しかし、信者増加の理由を「甘露」ではないかと推察している点などは、『佛教』には見られない。世間を騒がせている「邪教」天理教をただ批判する目的で掲載したというよりも、当時急速に信者数を獲得していた天理教に注目し、その理由を探ろうとしている様子がかがわかる。特に、日本で宣教活動を行う欧米人宣教師たちにとって、注目に値する存在になっていたことは確かであろう。事実、キリスト教宣教師による当時の日本の宗教事情に関する報告書のなかで天理教に言及するものも、この頃からはしばしば見られるようになってきているのである。グリーンが天理教教会本部を訪問した明治27年4月が、丁度この記事が出たところであるというのも、非常に興味深い点である。次号以降、日本の文献からの引用だけではなく、欧米人の目でみた天理教に関する記述についてさらにみていくことにする。